

映像化時代

目次

映像化時代

- 一、 映像の特徴
- 二、 読書との違い
- 三、 自然と選択を：
- 四、 長所や利点
- 五、 テレビの推移
- 六、 テレビの影響
- 七、 記憶の推移
- 八、 映像の流れとは
- 九、 潜在意識
- 十、 子供への影響
- 十一、 家庭環境
- 十二、 乳幼児から

人間の眼とカメラの眼との違い

- 一、 人間の眼
- 二、 カメラの眼
- 三、 写真の特徴
- 四、 映像の特徴
- 五、 インターネット時代
- 六、 結び

映像化時代

映像化時代

さて、「映像化時代」というのは、今までのような「活字」を中心とした伝達方法ではなく、例えば、映画、テレビ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、動画、(写真)、その他、そのような様々な「映像」(写真)などを使つての伝達方法がより多くなる時代のことである。

一、特徴は

例えば、テレビの場合を例にとつて話を前に進めてみたいと思うが、われわれは、ふつう一画面の映像を正確に理解してから次に進むのではなく、むしろテレビに映し出されて来る「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れていくのだろう。つまり、一画面、一画面の映像を正確に、あるいは厳密に理解してから前に進むのではなく、むしろ「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れていくのだろう。

そして、その「映像の流れ」というのは、次から次へと、例えば、コマーシャルなどの場合には、極めて短い時間に様々な内容なものが、ほとんど無関係に次から次へと流れて来るわけだが、われわれは、その「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れていくのだろう。いわばその「流れ」に身をまかせるといふ形になっているということである。そうでなければ、その映像の意味を理解することができなくなってしまうからである。

例えば、ある一時間番組なら一時間番組を見終わった後、自分は、何を見たのか、ほんの一部しか思い出せないというような場合だつて、時には生じて来るだろう。なぜ、そのようなことが起こり得るのかと言え、それは、「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れてしまっているからである。つまり、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)にしっかりと留まらないうちに、「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れてしまっているからである。それゆえ、一時間番組なら一時間番組を見終わった後、自分は、何を見たのか、ほんの一部しか思い出せないというような場合も、多いということである。

もう少し詳しく説明を試みたいと思うが、つまり、テレビに映し出されて来るある「映像」を見て感じた思いなり考えなりあるいは感情なりは、次に現われて来る「映像」を見て感じる思いなり考えなりあるいは感情なりによって薄められ、また、次に現われて来る「映像」を見て感じる思いなり考えなりあるいは感情なりによって、今までの思いなり考えなりあるいは感情なりは、さらに薄められ、また、次に現われて来る「映像」というように、次から次へと現われて来る「映像」によって薄められていくわけである。

それゆえ、その時、その時に感じた思いなり考えなりあるいは感情なりは、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)にしっかりと留まらないうちに、「映像の流れ」と一緒に多くは流れてしまっているからである。それゆえ、一時間番組を見終わった後、自分は、何を見たのか、ほんの一部しか思い出せないというような場合も、多いということである。

ふつう、われわれは、一画面、一画面の映像をしっかりと正確に、また、厳密に理解し

てから前に進んでいくのではなく、むしろ「映像の流れ」に身をまかせるといふような形になっているのだろう。そして、あるテレビ番組を見終わった後、鮮やかに甦よみがえって来るのは、多くの場合、その人にとってより強く印象に残った場面だけになるのだろう。——例えば、あのシーンは、実に感動的だったとか、あのシーンは、実に見応えがあったとか、あのシーンは、実に印象的だったとか、あのシーンでは涙が出て止まらなかったとか、あのシーンは、実に恐ろしかったとか、あのシーンは、実によかったとか、あるいは単に面白かったとか、楽しかったとか、意外につまらなかったとか、期待はずれであったとか、非常に神秘的だったとか、あるいは非常に画面がきれいだったとか、あるいは、あの女優さんは、非常に魅力的だったとか、彼女の目が特に印象的だったとか、あるいはあの男優さんの演技は、実によかったとか、魅力的だったとか、スタイルや顔立ちがよかったとか、さらにもっと細かく見ていけば、顔にしわがあるとかないとか、ほくろやしみ、その他などがあるとかないとか、髪が長いとか短いとか、色が白いとか黒いとか、衣装がどうか、足が長いとか短いとか、太っているとかやせているとか、その他、そういうふうには、どうしても「感覚的」かつ「表面的」にとらえていることも多いのだろう。

つまり、「映像」というのは、特に「目」の感覚に強く訴えることが非常に多く、それゆえ、どうしても見た目のよいもの、カッコいいもの、表面的にきれいなもののほうが、一般的にはより受け入れやすくなるということである。もちろん、「耳」の感覚に強く訴える場合もあるだろうし、また、「心や精神」などに強く訴えるものも数多くあるだろうが、一般的に言って、「映像」というのは、本質的に「目や耳」などの感覚器官に強く訴えるものである。そして、「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れて行きやすいものである。もちろん、意識的に、一画面、一画面を、あるいは「流れる映像」をしっかりと見極めている人たちもいるだろうが、しかし、一般的に言って、われわれは、まさに「受け身」的な存在であり、どうしても「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れてしまう傾向があり、一画面、一画面を正確にしっかりと見極めてから前に進むというよりは、やはり「映像の流れ」と一緒に流れて行きやすいものである。

二、読書

一方、「読書」というのは、一字一句の意味をそれなりにしっかりと理解しながら、あるいは、それなりに書物に書かれている内容を消化しながら、前に進むのがふつうであり、それは、非常に「意識的」なものである。あるいは非常に「積極的」なものであり、また、精神を集中させて書かれている内容の意味をしっかりと理解しようと努めているものである。それゆえ、「頭の中」(或いは「心の中」)には「ある確かな手応え」を持って入って来るのでふつうではないかと思う。ところが、「映像」というのは、どうしても次から次へと流れて来るものであり、一画面、一画面をしっかりと正確に、また、厳密に理解してから前に進むというよりは、むしろ「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れて行きやすいものである。

例えば、ある「映像の流れ」を見て、その時、感じたことや思ったことを、そこで立ち止まって、じっくりと腰を据えて考えるというわけにもいかないだろう。また、内容がよ

く分からないからと言って、そこで立ち止まるわけにもいかず、もし、立ち止まってしまえば、次から次へと現われて来る「映像」への注意が散漫になり、その後の「映像」を見ながしてしまふことが多くなり、その結果、その後の「映像の流れ」がどういう内容のものであったか、よく分からなくなってしまうからである。それゆえ、どうしても「映像の流れ」に身をまかせるような形にならざるを得ないものである。

もちろん、今日では、DVDやハードディスクなどに録画ができ得るので、何度でも同じ「映像」を納得がいくまで見ることができ得るかと思うが、しかし、それ以外の一般にテレビを見ている場合には、やはり「映像の流れ」に身をまかせるような形にならざるを得ないものである。——一方、読書の場合には、もし、意味がよく分からなくなれば、少し前からまた読み直して、その書かれている内容をしっかりと理解しながら、前に進んでいくことができ得るわけである。つまり、自分の速度で何度でもじっくりと時間をかけて読み直すことができ得るが、「映像」の場合には、どうしても、その「映像の流れ」に身をまかせるような形にならざるを得ないものである。

三、選択

もちろん、テレビの場合でも、積極的に、また、意識的に映し出されて来る「映像」の一面、二面をしっかりと見極めながら、前に進んでいる人たちも、それなりにいることにはなるのだろうが、しかし、一般的に言つて、例えば、テレビの場合、ニュースとか、ドラマとか、ワイド番組とか、幼児向け番組とか、音楽番組とか、自然や動植物などを扱った番組とか、料理番組とか、アニメ番組とか、クイズ番組とか、趣味や教養的な番組とか、バラエティー番組とか、あるいはスポーツ番組とか、特別報道番組とか、その他、もう実にいろいろな番組が各局で放送されているかと思う。しかも、われわれは、ふつうこれらの番組をある時間ずつと見続けていることになるわけである。

例えば、コマーシャルやニュースあるいはワイド番組などは、比較的短い時間に実にいろいろな内容のものが、次から次へと現われて来るものである。特にコマーシャルの場合を例にとつて話をしてみたいと思うが、コマーシャルというのは、極めて短い時間（十五秒か三十秒）の間に、それぞれお互い関連のない内容のものが、次から次へと現われて来るものである。試しに、その一面、二面を積極的に、また、意識的にしっかりと見極めようとして見入っていると、やがて、気持ちが変わりながら来るのを感じるだろう。なぜ、気持ちが変わりながら来るかと言えば、それは、あまりにも短い時間の間にそれぞれ関連のない内容のものが、次から次へと現われて来るからであり、われわれの「心や精神」は、それに十分に対応しきれなくなるからである。つまり、それぞれお互い関連のない内容のものを次から次へと意識的に、また、積極的にしっかりと厳密に見極めようとして見入るといふことは、われわれ人間の「心や精神」としては、とても耐えられないことだからである。それを無理に行なえば、かえって、人間の健全な「精神や感情あるいは感覚」などを傷つけてしまう危険性すら生じて来るものである。

例えば、テレビを二時間なら二時間、三時間なら三時間、ずっと続けて見ているということは、実にいろいろな内容のものをずっと見続けていることになるかと思う。例えば、ニュースをはじめ、スポーツとか、アニメとか、バラエティー番組とか、恋愛ドラマとか、

ホームドラマとか、サスペンスものとか、また、医療ものとか、歴史ものとか、時代劇とか、クイズものとか、趣味や教育的なものとか、自然や動植物を扱ったものとか、歌や音楽的なものとか、ワイド番組とか、特別報道番組とか、その他、また、それぞれの番組の合間合間には、様々な「CM」（コマーシャル）などが民放では数多く入ることになる。

そして、その一つ一つの「番組の内容」をもっと細かく見ていけば、悲しいもの、怖いもの、恐ろしいもの、驚くようなもの、おもしろいもの、楽しいもの、まじめなもの、また、悲しい場面、やりきれない場面、つらい場面、うっとりするような場面、笑いこぼるような場面、いやな場面、あきれるような場面、イライラするような場面、見入るような場面、心惹かれるような場面、唾然とするような場面、感動するような場面、涙が出て止まらないような場面、その他、そういう実にいるような場面が、次から次へともうめまぐるしくごっちゃになって流れて来るものである。それら一つ一つを積極的に、また、意識的にしっかりと厳密に見極めようとしてテレビに見入るということは、かえって、われわれ人間の健全な「精神や感情あるいは感覚」などを傷つけたり、あるいは破壊してしまう危険性すら生じて来るものである。

それゆえ、われわれは、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、いわゆる「選択」を行なっているのである。そして、好きな場面、見たい場面、あるいは興味のある場面に對しては、より積極的に、また、より意識的に見ているわけだが、それ以外のあまり興味を引かない場面に對しては、多くの場合、軽く見流している、軽く聞き流していることになるのだろう。——例えば、一時間番組なら一時間番組を、最初から最後までずっと意識的に、また、積極的に見入るのではなく、むしろ、われわれは、自分の見たい場面、興味のある場面、あるいは心惹かれるような場面に對しては、より意識的に、また、より積極的に見たり、聞いたりしているわけだが、それ以外の場合に對しては、むしろ、あまり積極的でもなく、意識的でもなく、何となく軽く見流している、あるいは軽く聞き流しているというのが、ふつう一般的になるかと思う。

つまり、われわれは、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、その人なりに「選択」を行なっているのであり、好きな場面、興味のある場面、あるいは心惹かれるような場面に對しては、より積極的に、また、より意識的に見たり、聞いたりしているわけだが、それ以外のあまり興味のない心惹かれないものには、むしろ軽く見流している、軽く聞き流しているということがある。われわれは、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、その人なりに「選択」を行なっているのである。それは、何もテレビや映画などに限ったことではなく、この世にあるありとあらゆる対象に對しても、われわれは、ふつう誰もがその人なりにその人なりの「選択」を行なっているものであり、好きなもの、興味のあるもの、あるいは心惹かれるようなものには、より積極的に、また、より意識的に、「見たり、聞いたり、嗅いだり、味わったり、感じたり」しているわけだが、それ以外の対象に對しては、むしろ、その対象を軽く見流している、軽く聞き流している、あるいはほとんど無意識の状態になっている、もちろん、時には嫌悪感や拒絶反応などを示している場合もあるのだろう。それゆえ、われわれは、自分の好きなもの、興味のあるもの、あるいは心惹かれるようなものからこそ、好んでいろいろなることを学び取っているということでもあるのである。

四、長所

話を元に戻して、ここで、「テレビ」の持つ機能の長所や利点について、少し話をしてみたいと思う。まず第一に、「映像」の特徴は、何かと言えば、それは、もちろん、テレビのカメラの「眼」によってとらえられた対象は、そのまま「映像」となって、われわれ見る側に、その対象をそのままそっくり見せてくれるというところである。例えば、ニュース番組などで、何か事件や事故が発生した現場から生中継を行なえば、その事件や事故が起こった現場の生々しい様子を、カメラの眼を通して見せてくれるものである。それは、事件現場や事故現場、爆発事故や火事現場、また、台風や地震、山火事や火山爆発などの様子や被害状況、或いは、様々な年中行事やお祭りそれに町の様子や人々の表情、その他、何であれ、生中継を行なえば、そのままそっくりその状況を見せてくれるものである。

つまり、「テレビ」の持つ最大の「機能」（長所）は、何かと問えば、それは、まさに「生中継」が出来るということである。それは、国内であろうと国外であろうと、まったく関係なく、今、現に起こっていることを同時に、しかもそのままそっくり見せてくれることであり、これは、何と言っても、最大特徴の一つなのである。——例えば、録画や編集されたものであれば、何もテレビでなくても、映画やDVDあるいはハードディスク（録画用）、その他などでも可能であるが、今、現に起こっているものをそのままそっくり見せてくれるのは、テレビやその他の「生中継」だけであり、それは、今、現在と同時進行をしているものである。——つまり、今そのものを、現在そのものをそのままそっくり映し出しているものであり、映画やDVDあるいはハードディスク（録画用）、その他などのように時間的にはすでに過去になっているものではなく、今、この時、この瞬間を、まさに鮮やかに映し出しているわけであるから、それが何と言っても、「テレビ」の持つ機能の最大長所の一つと呼んでもよいものである。

例えば、スポーツの「生中継」などは、テレビの機能が最も端的に発揮されるものの一つかも知れない。とにかく、それが国内であろうと国外で行なわれているものであれ、そのスポーツの試合の模様を同時に、しかもそのままそっくり家で寝転びながらも見ることができるわけであるから、これは、何と言っても、素晴らしいことではないだろうか。しかも、選手の顔の表情やもう一度見たい場面なども、リプレーやスローなどで、もう一度、見せてくれるわけであるから、これは、やはり素晴らしいことだと思ふ。ただ難点を敢えて一つ上げれば、それは、やはり試合会場のいわゆる「生の雰囲気や迫力あるいは緊迫感」などが、いま一つ直に伝わってこないという難点があるかと思ふ。しかし、それ以外には特になく、とにかく、今、現に行なわれている試合の模様をそのままそっくりしかも間近に、また、鮮明な映像で見せてくれるわけであるから、これは、何と言っても、「テレビ」の機能が最も端的に発揮されているものなのである。つまり、「テレビ」の機能の最大長所の一つは、まさに「生中継」を行なうことが出来るということであり、それは、今そのものを、現在そのものを（もちろん、カメラの「眼」を通してであるが）、そのままそっくり映し出しているということである。

それ以外にも、「テレビ」の機能の特徴は、まだ数多くあるわけである。それは、いわゆる「百聞は一見に如かず」ということになるかと思ふ。例えば、国内は、言うまでもなく、まだ行ったこともない各国それぞれの風景や街並みあるいは人々の表情や生活ぶりな

どをそのままそっくり見せてくれるし、また、自然の風景や動植物の生態なども、じつくりと鮮明な「映像」で見せてくれるものである。また、ふつうでは見ることでできない宇宙の様子や海底の様子、また、胎内の様子や微生物の様子なども、鮮やかな「映像」で見せてくれるものである。その他、それが、たとえどのような内容の番組であっても、テレビのカメラの「眼」によってとらえられたものは、もちろん、生中継以外は、様々な編集過程を経るにしても、その対象を一応そのままそっくり映し出してくれるものである。そのように、テレビの持つ長所の一つには、いわゆる「百聞は一見に如かず」というところがあり、それが、「映像」の最大長所の一つにもなるということである。

五、テレビの推移

テレビは、最初の頃は、白黒だったものが、今では、鮮明なカラー映像に変わり、音声多重や録画装置などもでき、また、衛星放送をはじめ、「デジタル化」やチャンネルが数多くある「マルチチャンネル化」も進み、さらに、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、カメラ、その他などの様々な端末とも結びついては、世界中の実に多種多様な「情報や娯楽」などが、家庭に居ながらにして見られる「マルチメディア化」も一層進むことになるのだろう。つまり、テレビは、現時点の機能のまま留まるのではなく、今後、ますます様々な端末などとも結びついて、その機能をさらに高めようとしているものである。それゆえ、テレビの持つ役割や有益性は、今後、ますます大きくなっていく可能性が、より高いということである。それでは、なぜ、テレビは、とかく「悪者扱い」されやすいのだろうか。これほどまでに多くの利点がありながら、どうしてなのだろうか？

まず第一に、考えられることは、まだテレビのなかった頃の家庭生活というものを思い出してみると、家庭の中心は、両親や祖父母であり、子供たちは、その両親や祖父母たちからいろいろな話を聞きながら育ったわけである。つまり、そこには家族間の直接的な会話が数多くあったということである。ところが、テレビが家庭の中心にどっかと重い腰を下ろして居座るようになってから、家庭の中心は、テレビに取って代わられ、しかも、子供たちは、親や祖父母たちの言うことよりも、むしろテレビの言うことを信じるようになってしまったということである。そして、家のなかでは、兄弟と遊んだり、また、両親や祖父母とあれこれ話をしたりという、いわば人間との直接的な関わりが中心であったものから、今やテレビを中心として、そのテレビを見ながらということになれば、どうしても人間との直接的な関わりが少なくなってしまう。つまり、外では友達かと思いつき遊び合い、そして、家では家族といる話をしたりする機会が、だんだんと少なくなっているということである。そして、テレビをじっと見入っている間は、からだを動かすこともないので、その間は、とかくわれわれから活動を奪ってしまうものである。つまり、テレビが茶の間にとっかと重い腰を下ろして居座るようになってから、いわゆる家族間では、とかく面と向かつての直接的な会話が少なくなり、多くは、テレビを見ながらの会話となりやすいたともに、子供たちは、一般に、親の言うことよりも、むしろテレビの言うことを信じるような傾向を生み出してしまったということである。また、外では、近所の子供たちと思いつき遊び合う機会も奪われやすくなり、人間との直接的な関わりが少なくなっている傾向があるということである。もちろん、それは、習い事や学習塾通いなど

が、子供たちから様々な「遊び」を奪っているということでもあるのだろう。

ただ、ここで特に言いたいことは、ほかでもなく、それは、人間との直接的な関わりが少なくなるということ、子供たちの「社会性」が健全に育つ機会がとかく奪われやすいということである。つまり、「親」中心から「テレビ」中心の家庭生活に移行することによって、親子間での直接的な会話や関わり方が、希薄で表面的なものになりやすく、また、友だちとの関係も、通り一遍の表面的なつき合いになって、親密で直接的な関わりが希薄になりやすいということである。なぜなら、人間との直接的な関わりを持ってこそ、そこに「親密さや信頼感」なども生じて来るものであるが、いわゆる「テレビ」を通じての間接的な「関わり」というのは、極めて気楽なものになるからである。

つまり、相手のことをあれこれ思えばかることが、まったく必要ではないからである。しかし、人間と直接関わるということは、そこには実に様々なあつれきや揉め事あるいはいやなことや煩わしいことなどが生じて来るものである。もちろん、楽しいことやうれしいことなども多々あるだろうが、また、様々な事態にも対処しなければならぬものである。それは、かなり大変なことであるが、そういう人間との直接的な関わりを通じて、様々な事態に直面した時の臨機応変の対応の仕方を、自然と学ぶことにもなるわけである。つまり、子供たちは、友だちとの様々な「遊び」などを通じて、人間との直接的な関わり方や様々な事態に直面した時に、どのように対応したらよいのかを直接的に「体験・経験」し、身を以って学ぶことになるということである。

一方、「テレビ」や「ゲーム」と関わっているだけでは、そういう人間との直接的な関わり方は、身に付かないものである。なぜなら、「テレビ」や「ゲーム」との関わり方は、相手のことを特に思いやる必要がまったくなく、こちらから思いを寄せるだけで、まさに一方通行になりやすいからであるが、人間との直接的な関わり方では、相手は、いつも自分の思い通りに言ったり、やったりしてくれるものではないのである。友だちとの直接的な様々な「遊び」などを通じてこそ、人間との直接的な関わり方や様々な事態に直面した時の対応の仕方などを理屈ではなく、まさに身を以って「体験・経験」し、直接的に学ぶことになるのである。そして、子供の時こそは、そういう人間との直接的な関わりを十分に持たないと、人間としての十分な「社会性」がとかく欠落しやすいのである。

つまり、子供たちの「社会性」が健全に育っていく機会が、とかく奪われやすいということである。それゆえ、子供の頃には、人間との直接的な関わりはもとより、いろいろな動植物、自然、その他との直接的な関わりもできるだけ多く持たせることが、極めて大事なことになるのである。なぜなら、子供の頃のそういう様々な直接的な「体験・経験」こそは、まさに「原体験」となり、その人のその後のいわゆる「人間性」を形づくっていく大きな「要素」（要因）となっていくものだからである。それゆえ、人間性豊かで、創造性にも富んだ人間を真に育てたいと思うならば、もっと自然のなかで思いっきり友だちと遊ばせるべきであり、その「自然の中」にこそ、いわゆる物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などが深く眠っている、まさに「宝庫」なのである。もちろん、学校の勉強や習い事なども大事なことはあるが、それとともに、多くの子供たちと様々な「遊び」で思いっきり遊び合うということも、それに勝るとも劣らず大事なことになるわけである。なぜなら、様々な「人間や動植物、自然、その他」などとの直接的な関わりこそは、その人が「ものを考える」上での最も信頼できる根底的な「拠り所」であり、また、様々な「体

験・経験」を踏まえての、まさに「生きた知識」ともなり得るものだからである。

六、テレビの影響

ところで、われわれは、「テレビ」を見始めると、どうしてもだらだらと見続けてしまうものであり、また、毎日のようにテレビを通して実に様々なものを見聞きしているのも、もうどういふものに対しても、慣れっこになってしまい、いわゆる「新鮮な驚き」や「素朴な感動」といふものは、とかく得られにくくなっていくのではないかと思う。また、変化に富んだものでないと、すぐに飽きてしまい、とかく刺激的なものを求めやすいものである。そして、事件から事件へと飛び移っていく、話題から話題へと飛び移っていく。つまり、表面的な現象を次から次へと追うようになりやすい。そして、一つのことを深く厳密に考えることが、もう面倒臭くなって来る。また、あまりにも手軽にいろいろなものを見る「テレビ」は、われわれに見せてくれるために、他人のやっていることを見聞きしているだけでももう十分になってしまう。あるいは自分が実際にそういう経験をしようとしたような錯覚に陥ってしまうこともあり、また、いろいろ刺激的な内容や話題などによって、われわれの心は、意味なく振りまわされたり、とかく自分を見失いやすいわけである。そして、地道に努力を積み重ねていくことが、何か馬鹿馬鹿しくなって来て、遠くのを努力を積み重ねて追い求めるといふよりは、もっと手っ取り早い方法で、先のことなどはあまり考えずに、とにかく、「目先の欲や目先の快楽」などを貪欲にむさぼりたいという安直で現実的な「精神状態」にもなりやすいということである。もちろん、必ず、そうなるということではなく、一般的に、そういう傾向があるということである。

それでは、いっそのことテレビなどは見ない方がよいのだろうか。考えてみれば、長い人類の歴史のなかで、テレビが出現して、われわれ人間に何らかの影響を与え始めたのは、ごく最近のことであり、それまではテレビなどなくても、むしろ、何の不自由もなく生活できたわけである。また、様々な知識や情報などは、主に「活字」文化を通じて得てきたわけである。ところが、終戦後、民主主義とともに、テレビを含めた実に様々な電化製品が、急速に一般家庭へと普及し、今日では、テレビや様々な電化製品のない生活などほとんど考えられないほど、われわれの生活のなかに深く溶け込んでいるわけであるが、今後、ますます様々なニューメディア類が、家庭の中に入ってくることになるのだろうか。

そして、今までは、主に「活字」文化を中心としたものから、今後は、「映画、テレビ、アニメ、マンガ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、動画(写真)、その他」などを使った伝達手段が、より多くなるということである。それらをひっくるめて、いわゆる「映像化時代」と呼びたいわけであるが、今までは、主に「活字」によって「情報伝達」を行なっていたものから、今後は、まさに「映像や写真或いは漫画やアニメ」その他などを使つての「情報伝達」がより多くなるということである。

むしろ、だからと言って、「活字」による「情報伝達」が全くなくなってしまうわけではなく、むしろ、今までは七割から八割近くまでが「活字」に頼っていたものから、今後は、「活字」と「映像や写真或いは漫画やアニメ」などの割り合いが、五分五分になる、あるいはそれに近い割合になるということである。それは、むしろ歓迎すべき状態なのかも知れない。どちらか一方に極端に傾くことは、かえって、必要かつ十分な「情報伝達」

ができにくいのかも知れない。つまり、「活字」文化と「映像」文化とをより高いところで深く調和させることができれば、今まで以上に必要かつ十分な「情報伝達」や「意思伝達」が可能になるのかも知れない。また、そういう方向に向けて努力をしていくべきなのだろう。

確かに、テレビには様々な弊害もあるが、また、いろいろな長所や利点などもあるのである。そして、テレビほど「今、現在」を最も如実に映し出し、また、「今、現在」の人々の言動を如実に映し出しているものはないのであり、テレビ番組の「質や内容」が落ちたと嘆くよりも、そういうものを好んで見聞きしているわれわれ見る側の「意識」や「精神状態」を、もう一度、見直した方がよいのかも知れない。というのも、われわれ人間は、結局、自分に見合ったもの、あるいは自分の好みや趣味にあったものを好んで見聞きしているものだからである。ただ問題があるとすれば、それは、やはり、テレビと子供との問題になって来るのだろう。子供というのは、どうしてもテレビから流れて来る「映像」をそのままそっくり見聞きし、そして、とかく「影響を受けやすい、また、真似しやすい」という傾向があるということである。つまり、子供たちは、真似ることから様々なことを学んでいくことが多いからである。そして、テレビで見聞きしたものが、その人の「心の中」に蓄えられるわけであるが、それが、その人の人生にどのような影響を与えていくかは、なかなか厳密には分かりにくいものである。ただ一般的に、子供というのは、とかく「影響を受けやすい、また、真似しやすい」という傾向があることは、間違いないことであり、そのことは、一応考慮に入れておいてもよいことである。

七、記憶の推移

確かに、われわれは、毎日、様々な「テレビ番組」を見聞きしているので、誰もがそのテレビから何らかの「影響」を受けていることは間違いないだろう。しかし、一方、毎日、見聞きしている様々な「テレビ番組」の詳しい内容などは、ほとんど忘れていくという現実があり、そして、何日か立てば、もうほとんど想い出すこともできないものも極めて多いとともに、たとえ想い出すことができ得ても、その多くは、大まかどこか曖昧で漠然としたものであり、細かなところまではなかなか正確に想い出すことは難しく、それゆえ、特に強く印象に残った部分だけになってしまいうことも多いのだろう。それは、やはり「テレビ」という媒体を通じて間接的に見聞きした、まさに「間接的な知覚」であり、自分が実際に「体験・経験」した「直接的な知覚」とは全く違って、いわゆる直接の「手応え」というものがないからではないかと思う。

それと同時に、「テレビ」という媒体が生来そういうものなのである。つまり、次から次へと様々な「映像」が休みなく流れて来るのであり、われわれは、その「映像の流れ」に身をまかせ、一緒に流れていくしかないからである。そのことは最初のところでも触れたように、テレビに映し出されて来るある「映像」を見て感じた思いなり考えなりあるいは感情なりは、次に現われて来る「映像」を見て感じる思いなり考えなりあるいは感情なりによって薄められ、また、次に現われて来る「映像」というように、次から次へと現われて来る「映像」によって、その時に感じた思いなり考えなりあるいは感情なりは薄められ、まだ「心の中」にしっかりと留まらないうちに流れてしまう傾向が強いわけである。

それでは、どうしたらよいのか？ それは、やはりだらだらと長く見続けられないことも知れない。何時間も雑多なものを見続けてしまうと、どうしても様々な印象が入り交じって、一つ一つの印象が薄れてしまうからである。それゆえ、ある程度、決めて見るといことが大事になって来るのかも知れない。そして、「心の中」にしっかりと「記憶」しておくためには、やはり、何となく見聞きするのではなく、かなり意識的に、また、積極的に見聞きすれば、それだけ「記憶」に留めることができやすくなるということである。

もちろん、テレビは、「娯楽」としてもっと気楽に楽しめば、それでよいものである。ただ、「心の中」にしっかりと「記憶」に留めたいと願うならば、やはりかなり積極的に、また、意識的に見聞きすることが大事になって来るのだろう。何となくだらだらと見ているだけでは、どうしても次から次へと流れて来る「映像の流れ」と一緒に自分の考えも思いも感情も流れやすく、「心の中」にしっかりと留めることは、難しいことになるのだろう。それに加えて、見たものを何度か思い出しては、それらを「心の中」で「反芻」してみることも大事なことであり、この「反芻」の積み重ねこそは、はつきりとした「記憶」として「心の中」にしっかりと留めさせるものであると共に、過去の様々な「体験・経験」を、いわゆる「思い出」として再構築させている「心の働き」でもあるわけである。

例えば、「クイズ番組」などであれば、様々な「知識」を得たり、学んだりすることができ得るじゃないかと思いがちであるが、確かに、一面ではそういうところがあるのかも知れない。しかし、「クイズ番組」などによって得た「知識」などというのは、いわば断片的な「知識」であり、何日か立てば、ほとんど忘れ果ててしまうものばかりである。それは、まさに「切り花」のごとく「根っ子」がないために、やがて枯れてしまうものである。大地にしっかりと根を張って、そこから養分を吸い上げ、自らの「花」を咲かせるようなものとは、本質的に違うものなのである。

試しに、「クイズ番組」を見終わったあと、どういう内容の「クイズ」があったかを思い出してみれば、すぐに分かることであるが、そのほとんどをすでに忘れてしまつて、あいまいにしか思い出すことはできないものである。それは、なぜか？ それは、あまりにも「断片的な知識」であり、また、幾つも続けて出題され、しかもお互いの間には何のつながりもなく、また、たとえつながりがあったとしても、その問題は、自分がぜひとも知りたいことであるとは限らず、自分がほんとうに知りたいことを何かで調べたりして、自ら学んだものであれば、記憶に残りやすいものであるが、「テレビ」というのは、一方的に様々な内容をただ提供してくれるだけだからである。そして、「クイズ番組」で得た「知識」というのは、あまりにも断片的であり、それは、ちょうど巨大なジグソーパズルの一片のようなものであり、その知識だけでは、何の役にも立たないのと同時に、やがて忘れ果ててしまうことが非常に多いわけである。

例えば、「ニュース番組」も実にいろいろな内容のものが、次から次へと放送されて来るものであるが、その「ニュース番組」を見終わったあと、正確に思い出せるものが幾つあるか、試しにやってみると非常によく分かるのであるが、かなり真剣にまた意識的に見れば、ある程度は思い出すことができるだろう。しかし、それほど意識的ではなく、ふだんテレビを見るような軽い気持ちでニュース番組を見たあと、さて、今日はどんなニュースがあったかを思い出す段になった時に、いかに覚えていないかに愕然とすることはよいことなのである。また、思い出せたものがどのくらい正確に思い出せたかを試してみ、

正確にまた厳密に想い出せるものが極めて少ないことに、二度愕然とすることは、さらによいことなのである。つまり、想い出せたものの多くは、大ざっぱに覚えておられるか、あるいはかなり曖昧に覚えていることが多いのだろう。それは、何も「クイズ番組」や「ニュース番組」に限ったことではなく、それは、「テレビ番組」すべてについて言えることである。——それに加えて、二時間なら二時間、三時間なら三時間、テレビを見続けるとしたら、それこそ極めて様々なものが、次から次へと現われて来るものである。しかも、われわれは、それらの「映像」をそれほど不自然さを感じずに見ているかと思うが、しかし、よく見てみると、「映像の流れ」というのは、様々な内容のものが人工的に結びついた実に「不自然な流れ」であり、それは、「水の流れ」のような自然な流れとは、まったく全然違うものなのである。

八、映像の流れとは

例えば、「映画」もテレビの「ドラマ」も基本的には全く同じことだと思うが、あるカットとあるカットを幾つもつなぎ合わせたものであり、それが一時間なら一時間の「映像の流れ」になるわけである。だから、画面をよく見ていると、「映像の流れ」というのは、非常に不自然な流れであり、それは、途切れのない「川の流れ」のような自然な流れとは全く違って、あるカットとあるカットとを無数につなぎ合わせた人工的で不自然な流れなのである。むしろ、ドラマの流れは、コマーシャルの流れのように、それぞれお互い関連のないものが次から次へと流れて来る流れではなく、あるカットとあるカットとはお互い深い関連を持つ内容のものが流れて来るが、それでも画面をよく見ていると、ある画面からある画面へと、パツ、パツと画面が切れて新しいカット（画面）に入るのがよく見られるかと思う。それは、何も「ドラマ」だけに限ったことではなく、テレビ番組のすべての「映像の流れ」について言えることである。そして、そういうことに気づいてテレビの「映像」を見てみると、「映像の流れ」とは極めて人工的かつ不自然な流れであることにはつきりと気づくことになるわけである。ちなみに、画面がパツ、パツと切り替わるのを意識してしばらく見ていると、やがて何がなんだかその内容がよく理解できなくなってしまうほど、いわゆる「映像の流れ」というのは、あきれるばかりの「不自然な流れ」であることがはつきりと実感できるかと思う。

それでは、なぜ、われわれは、その「不自然さ」をほとんど感じないで見ていられるのだろうか？ それは、まず、「カット」と「カット」とのすき間を埋めているのは、われわれ見る側の「精神」であり、その「精神」によって、ごく自然に結びつけられて、見ている人は、そこに不自然さをあまり感じないで済んでいるわけである。しかし、そこには間違いなく「切れ間」があるのである。そして、その「切れ間」をわれわれ見る側の「精神」がほとんど無意識のうちにつなぎ合わせているわけだから、長い時間、テレビを見れば、その人の「精神」も「肉眼」も疲れて来るのは、むしろ当然なことなのである。

つまり、テレビの「映像」とは、まさに「つなぎ合わせた映像の流れ」であり、それを自然の流れとして見ることができるのは、われわれ見る側の「精神」（つまり「構成力」や「想像力」）によるものなのである。例えば、生放送の場合にも、カメラをパツ、パツと切り替えているので、自然な「映像の流れ」とはとても言えないものである。だから、

もし「つなぎ合わせの全くない映像の流れ」をつくろうとすれば、カメラをある場所にしっかりと固定をして、しかも、ある一定の方向から撮り続けることである。それを一時間なら一時間、撮り続ければ、切れ目のまったくない「映像の流れ」になるわけである。それは、「人工的な流れ」ではなく、極めて「自然の流れ」なので、見ている人の心もその「自然の流れ」によつて、心が落ち着き、開放され、なごむ効果を持っているものである。それは、なぜかと言えば、それは、まさに「自然の流れ」だからである。それは、ちょうどわれわれが川の「自然な流れ」を見ていると、次第に心が落ち着き、開放され、心がなごむのとまったく同じことであり、それは、まさに「自然の流れ」だからである。

一方、「映像の流れ」というのは、まさに人工的で不自然な流れであり、そういう人工的で不自然な流れに長く耐えられるはずもないわけだが、われわれは、平気で何時間でもテレビを見ていられるのは、一体、なぜなのか？ それは、実に簡単なことであり、われわれは、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、いわゆる「選択」を行なっているのである。つまり、好きな場面、見たい場面、あるいは興味のあるような場面に對しては、より積極的に、また、より意識的に見ているわけであるが、それ以外のあまり興味を引かれないような場面に對しては、多くの場合、軽く見流している、軽く聞き流していると言つてもよいのだろう。だからこそ、長い時間、平気で見ていられるのである。テレビから流れて来るすべての映像を、すべて意識的に、また、積極的に聞き取ることなどできるわけもないので、そんなことを無理に行なえば、かえつて、健全な精神を破壊してしまう危険性すら孕はらんでいるものである。それほどまでにあまりにも多種多様なものが、次から次へと休みなく流れて来るのが、まさにテレビの「映像の流れ」なのである。

話を元に戻しますが、「ニュース番組」を見たあと、想い出せたものをよく検討してみれば、それは、その人が何らかの興味や関心を持つて意識的に、また、積極的に見たものであることが多く、軽く見流したり、軽く聞き流してしまつたもの、あるいは無意識的な状態で見聞きしたものは、ほとんど忘れてしまふものである。おぼろに想い出すことがあつても、やがて、日が経てば、ほとんど忘れ果ててしまふものである。そして、「心の中」に記憶として残るのは、多くの場合、やはり、その人が何らかの興味や関心を持つて積極的に、また、意識的に見聞きしたものに限られて来るのだろう。また、逆に言えば、積極的に、また、意識的に見聞きしたものは、「心の中」に記憶として残りやすく、それほど意識的でもなく、積極的でもなく、何となく軽く見流したもの、軽く聞き流したもの、あるいは無意識的な状態で見聞きしたものは、時間の経過につれて、ほとんど忘れ果ててしまふことになるのだろう。これは、考えてみれば、あたり前のことであり、何もテレビに限つたことではなく、どういうことでも積極的に、また、意識的に見聞きしたものは、「心の中」に記憶として残りやすく、一方、あまり意識しないで見聞きしたものは、あるいは無意識的な状態で見聞きしたものは、「心の中」に記憶として残りにくいということである。

つまり、自ら意識的に見聞きしたり、学んだりしたものは、「心の中」に記憶として残りやすいものであるが、テレビなどを見て得た「断片的な知識」などは、その多くの場合、日が経つにつれて、ほとんど忘れ果ててしまうことが非常に多いわけである。例えば、ニュースなども、毎日、様々な事件や話題などをわれわれに提供してくれるわけだが、その人が特に「興味や関心」を持ったもの以外は、ほとんど忘れ果ててしまふものである。何度も言うように、自ら積極的に、また、意識的に見聞きしたり、学んだりしたものこそ、

「心の中」に記憶として残りやすいものであり、通り一遍に見たり、聞いたりしたことは、とかく忘れ果ててしまうことが、非常に多いということである。

九、潜在意識

だからと言って、それらがすべて無意味なことであるというのではない。通り一遍でも、見たり、聞いたりしたものは、大原則として、「心の中」に蓄積されるものである。つまり、「潜在意識」として「心の中」に残ることになるのである。

例えば、ふだんわれわれは、いわゆる「コマーシャル」というものを、それほど一生懸命に見たり、聞いたりしているわけではなく、多くの場合、何気なく見聞きしている、つまり、軽く見流したり、軽く聞き流しているわけだから、それが一度限りであるならば、やがては完全に忘れ果てて想い出すこともないだろう。ところが、「コマーシャル」というのは、何度も何度も同じような内容のものを流すわけである。そうすると、「コマーシャル」というものを、そんなに一生懸命見ていなくても、何度も見ているうちに、自然と「心の中」に蓄積されて、いわば「潜在意識」として残るようになるのである。

例えば、スーパーマーケットなどに買い物に行けば、そこにはいろいろな「食料品」が並べられている。そこで、例えば、「即席ラーメン^{インスタント}」を例にとつて話してみたいと思うが、店には様々な「ラーメン」が実に数多く並んでいるわけであるが、その中から何を選ぶかの段になった時に、むろん、その人にお気に入りのラーメンがあれば、そのラーメンを取りあえずは買うであろうが、その時に、例えば、テレビのコマーシャルなどで見たことがあるラーメンを発見すれば、「……あつ、このラーメン、そう言えば、テレビのコマーシャルで宣伝しているのを見たことがあるわ！」というような感じで、その時に、ふと想い出すわけである。このふと「想い出す」というところが、最も大事な急所（まさに「核心部分」）なのである。つまり、ふだんは「心の中」に「潜在意識」として深く眠っていたものが、その「ラーメン」と出会った瞬間、いわゆる「無意識の世界」から「意識の世界」へと呼び起こされて、まさに「意識」の上ののぼって来るわけである。ふだんは心の底に深く眠っていて、想い出すこともほとんどないわけだが、スーパーマーケット、その他などに行つて、その「ラーメン」を見た瞬間に、ふと想い出しては、「……あつ、このラーメン、そう言えば、テレビのコマーシャルで見たことあるわ！」というような感じで興味や関心を示し、そして、「……このラーメン、一体、どんな味がするのか、一度、食べてみようかしら？」というような感じで購買欲をそそられることにもなるわけである。つまり、まったく知らないものに対しては、われわれは、なかなか「興味や関心あるいは親しみ」などを感じるといふことはできにくく、ましてや買うとなれば、なおさらのことになるのである。

本来、「コマーシャル」の役割というのは、できるだけ多くの人に「その存在」を知ってもらふことと同時に、いわゆる「興味や関心あるいは親しみ」などを感じさせることでもあるわけだ。そして、何度も何度も同じ内容のものを流すことによつて、自然とわれわれの「心の中」に蓄積されて、いわば「潜在意識」として残るようになるわけである。むろん、ふだんは「心の中」に深く眠っていて、想い出すこともほとんどないわけだが、何らかのきっかけで、ふと想い出すことになるわけである。

例えば、「スマホやパソコン」などに興味や関心を持ちはじめ、そして、「スマホやパソコン」を買いたいなあと思った時に、今までは何気なく軽く見流していたスマホやパソコンの「コマーシャル」などを真剣に見るようになるだろう。そして、いろいろとある「スマホやパソコン」のなかから何を選ぶかの段になった時に、まったく知らないものよりは、何らかの「コマーシャル」や「パンフレッド」あるいは「パソコン雑誌」などを見て知っている方が、「親しみ」を感じやすいし、また、買いやすいわけである。むろん、その人がどういうスマホやパソコンを欲しているのか、また、どのくらいの値段のものにしたいのか、そういうことを考慮に入れて買うわけであるが、その時でも、やはりまったく知らないものよりは、コマーシャルなどを見て知っている方に、「親しみ」を感じやすいし、また、買いやすいと言ってもよいのだろう。それが、「コマーシャル」というものが成り立つ大きな要因の一つである。何度くり返すようであるが、まったく知名度のない「商品」を買うというのは、買う側から言えば、なかなかできにくいことであり、どうしてもテレビやその他のコマーシャルなどで、安心して買うことができるという心理にもなるわけである。また、そういうものの方が、安心して買うことができるという心理にもなるわけである。

なぜ、各社が膨大な宣伝費を費やして、テレビやその他のところで大々的に宣伝を行なっているのかと言え、それは、やはり、まずできるだけ多くの人たちにその「商品」の存在を知ってもらいたいということ、もう一つは、知ってもらうことによって、それだけ「商品」に対して、自然と「興味や関心ある人は親しみ」なども持つてもらいたいということでもあるが、それに加えて、買いやすくなるからである。つまり、流れているコマーシャルが、もし人々の興味や関心を呼び起こすようなコマーシャルであればあるほど、それだけ見ている人たちは、より強い「興味や関心ある人は購買欲」などをそえられることになる。と同時に、それが全国的な規模での宣伝ともなれば、その数は、大変な数に上り、その結果、売り上げも一気に急上昇することにもなるわけである。

そして、宣伝には、よく「有名人」や「芸能人」などが数多く登場して来るが、それは、非常に簡単な理由からなのである。つまり、すでによく知られている有名人や芸能人であれば、それだけ多くの人々の興味や関心を集めやすいたともに、やはり親しみや信頼感などを与えることにもなるからである。また、その「商品」とその「人」とが自然と結びついて、例えば、「……誰々が宣伝している、あれだよ!」とか、「……ああ、誰々が宣伝しているあれか!」とか、また、「……誰々が宣伝しているあれなら、よく知っているよ!」というような感じで、「商品」と「その人」とが自然と結びついて、よりはっきりとした強い印象を与えやすく、それだけ宣伝効果もより高まることになるわけである。

それは、何も人間に限ったことではなく、人気の高い「動物」やその他の対象が、コマーシャルに使われることもあれば、また、「若い女性」が数多く登場するのも、一つには「新鮮な感じ」を与えるとともに、やはり多くの人たちの興味や関心を集めやすいからであろう。それは、もう何度くり返しているように、その人にとってまったく知らない「商品」というのは、買う側から言えば、どうしても興味や関心が向きにくく、また、買いにくいものである。なぜなら、それが果たしてよい商品なのか、信頼できる商品なのか、どういうものなのかが、まったく分からないからであり、そういうものに対しては、どうしても警戒心や敬遠する気持ちが、より強くなるものだからである。

やはり、よく知っているもの、安心して買えるものを選びやすいわけである。むろん、

値段の安いものに越したことはないが、その時でさえ、値段の安いものなかでも、まったく知らないものよりは、少しでも知っている商品を選びやすいわけである。ここに「コマーシャル」というものの存在理由の一つがあるわけである。つまり、「商品」の存在を知ってもらうだけでも、まったく知られていない状態よりは、遙かに有利な立場に立っているということである。それは、何も「商品」に限ったことではない。例えば、まったく知らない「店」にはなかなか入りにくいものであり、一度でも、あるいは行きつけの「店」の方にどうしても足が向きやすいという傾向は、多分にあるかと思うが、それは、やはり、それだけその「店」に親しみや気やすさあるいは信頼などを寄せているからであろう。もしいやな「店」だと思っていれば、なかなか行きにくくなるだろう。つまり、人間は、少しでも親しみや好感のもてるもの、また、興味や関心をそそられるもの、あるいは信頼できるようなものへと向かう性向が、はっきりとあるということである。

*

*

さて、「コマーシャル」の話が長くなったが、話をもとに戻して、いわゆる「潜在意識」についてももう少し話をしてみたいと思う。例えば、われわれは、毎日のように実に様々なものを「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ」ながら、実に様々な「体験・経験」をしているわけであるが、それらは、知らず識らずのうちに、「心の中」に蓄積されて、いわゆる「潜在意識」として「心の中」に残ることになるわけである。そして、ふだんは「心の中」に深く眠っていて、想い出すこともあまりないわけだが、ある日、ある時、何らかのきっかけから、ふと「あること」を想い出すことにもなるわけである。つまり、われわれは、この世に生を授かり、そして、今日まで生きてきた「全過去」(つまり「全体験・全経験・全学習・全想い出、その他」などを、誰もが自分の「心の中」に蓄^{たくわ}えているわけである。そして、ふだんは「潜在意識」として「心の底」(つまり「無意識の世界」)に深く眠っているわけであるが、何らかのきっかけから、ふとそれを「想い出す」ことにもなるわけである。——つまり、何らかのきっかけがあれば、何とか想い出すことのできるものと、もうどんなきっかけがあっても、まったく想い出すことのできないものとに大別されるかと思うが、そのどちらの場合であっても、その人の人生に有形無形の「影響」を与えていると言ってもよいのだろう。つまり、過去の「体験・経験」が、その人の人生に有形無形の「影響」を与えていることになるということである。

例えば、あの時、あの本を読んだことが、その後の自分の人生に大きな影響を与えているとか、あの時、いやな思いをしたことが、その後、今でもそれが好きになれない大きな理由であるとか、また、あの時、あの人に出逢ったことが、その後の自分の人生を大きく変えることになったとか、あるいは、あのことがあの出来事がまたあの出逢いが、その後の自分の人生にいろいろと大きな影響を与えているとか、その他、そういうふうに過去の様々な「体験・経験」というものが、その時だけではなく、その後のその人の人生にも大きな影響を与え続け、また、その人の「人間形成」にも、そして、その人の「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などにも少なからず「影響」を与えることにもなるのだろう。それは、例えば、「あの時、ああいう体験・経験したから、こうなのだ」と、自分でもはつきりと自覚できるものと、一方、そういうふうに「こうだから、こうなのだ」とはつきりと自覚できなくても、過去の様々な「体験・経験」が、その人に何らかの影響を少なからず与えていることも多いのだろう。そして、

過去の様々な「体験・経験」のどういうものが、どういうふうには作用して、その人をどのように動かしていくのかは、なかなか厳密には分かりにくいものである。

十、子供への影響

例えば、「……テレビは、子供たちについてどういう影響を与えているのか」ということが、よく議論されたりするものだが、この問題も簡単に片づく問題ではなく、なかなか難しい問題を孕^{はら}んでいるものである。——例えば、子供たちが好んで見る「テレビ番組」としては、やはり「アニメ」や「子供向け番組」などが多く、また、人気の高い「ヒーローもの」や笑いを中心とした「娯楽番組」、その他など、それは、その子供たちによっても、また、その時々によっても、見るものはみな違って来るだろうが、その多くは、子供向けや娯乐的なものを中心としたものになるのだろう。それは、もう一人ひとりの好みであり、その人が見たいものを見、見たくないものは見なければ、それでよいものであり、また、本来、テレビを見るとは、誰だってそうであるしかないだろう。それでは、なぜ、「テレビ番組」の内容は、とかく問題視されることが多いのだろうか？

例えば、暴力的なものや人殺しなどが多く出てくるもの、また、裸や濡れ場などの多いポルノチックなもの、あるいは残忍、残虐なもの、その他、そういうものは、子供たちにはあまりよい影響を与えないということと、とかく「批判や非難」の的^{まじ}になりやすいものであるが、それは、なぜかと言えば、それは、やはり「……子供たちは、影響を受けやすい、また、子供たちは、すぐに真似しやすい」ということである。確かに、子供たちは、すぐに真似をするという最大特徴を持っている。しかも、それは、大人の人たちが思っている以上に、遙かに様々なことで影響を受けやすく、また、真似しやすいものである。

例えば、乳幼児期などは、真似ることからほとんどことを学び取っているし、また、子供の遊びのなかの「何々ごっこ」というのは、すべて真似の遊びである。また、CMや人気アイドルの真似をしたり、また、社会の出来事や話題になった人物の言動を真似したり、身近な友だちの真似をしてからかかったりと、子供たちは、その時々の流行語なども巧みに取り入れては、様々なものを真似て楽しんでいくわけである。また、人のやっていることをすぐに真似たがる傾向もあり、誰々がやっているから、自分もやってみようかしら、と、すぐに影響を受けて真似したがる傾向もあり、だからこそ、様々な流行やブームなどが、子供たちや若い人たちの間からこそ、多くは生まれやすいわけである。むしろ大人の人たちでも多くのものからいろいろな影響を受けてはいるが、しかし、子供たちが様々なものから受ける「影響」というのは、大人の人たちが受けるような「間接的^{インディレクト}なもの」ではなく、それは、もっと「ストレート」であり、かつ「もろで直接的なもの」なのである。もつと言えば、「そのままそっくり影響を受けてしまう」傾向があるということである。

そんな馬鹿なことはないだろう。幼児ならともかく、小学高学年や中・高校生ぐらいになれば、もう誰だって自分でものを考える力も判断する力も備わって来るだろう、と反論するかも知れない。むしろ、自分でものを考える力も判断する力もそれなりに備わって来るだろう。そして、確かに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動しているように一見見えるが、その多くは、意外と何らかの「真似」か、その「影響」であることが極めて多いわけである。それは、もう本人にもそうとは気づかないほど根深い根源的なものなのである。

というのも、自分の「考えや判断」などに対して確たる自信の持てない時期にあたるからである。子供たちの「心」は、意外と不安定で頼りなくゆれ動いていて、どうしても他人の「意見や考え」などから影響を受けやすく、また、大きく左右されがちなのである。ほんのちよつとした相手の言動にも、「心」が激しくゆり動かされやすい時期なのである。

もちろん、自分でものを考える力も判断する力も持ち合わせているので、自ら考え、自ら判断し、自ら行動したいと思っているわけだが、一方では、自分の「考えや判断」その他などに対して、もう一つ、「確たる自信」が持てないという、そういう「精神的ジレンマの時期」にあたるわけである。それが、若い時の、変わりようのない「心の状態」であり、若い人の誰もが、多かれ少なかれ、そういう「心の状態」に置かれているということである。また、この若い時期は、いわゆる「好き嫌い」の激しい時期でもあり、好きなのは、積極的に好んで受け入れるが、一方、嫌いなものに対しては、強く時には徹底的に反発する時期でもあるわけである。その他、若い時の特徴は、いくらもあるだろうが、そういう若い人たちが、いわゆる「テレビ番組」からどういう影響を受けるかは、難しい問題であり、また、何らかの影響を受けたからと言って、それが即「行動」になる場合もあれば、そうならない場合もあるのだろう。また、テレビで見たり、聞いたりしたものは、原則として、「潜在意識」として「心の中」に蓄積されるので、それが何らかの形となつて、その人の人生に何らかの「影響」を与えることになるのかも知れない。そのように一般的に言つて、若い人たちは、様々なものから影響を受けやすく、また、それをすぐに真似しやすい傾向があるということに間違いなく、それは、若い人たちの髪型や服装あるいは言動などをみれば、そういう傾向があることは、もうすぐに理解できることである。

十一、家庭環境

むろん、誰だって「真似」することからいろいろなことを「学ぶ」ことになるので、いわゆる「真似」ること自体が悪いのではなく、ただ自分を見失うほど意味なく振りまわされないようにすれば、それは、それでよいのだろう。また、テレビ番組に対しても、あまり必要以上に神経質になることもないので、人間には本来、「健全な精神」が宿っているものであり、あまり極端になれば、それに対する反省も自ずと生じて来るものであり、それほどテレビ番組に目くじらを立てなくてもよいのだろう。というのも、子供たちに与える影響の最たるものは、なんとと言っても、「家庭環境」であり、父親に愛人がいるとか、母親が浮気をしているとか、その他で、両親の仲が悪く、いつも喧嘩ばかりしてお互いを罵り合っているとか、その他、夫婦の仲が悪いというのが、一番よくないのである。

というのも、テレビから受ける影響というのは、いわば「間接的なもの」であるが、一方、親から受けるものは、まさに「もろで直接的なもの」であり、しかも自分の親が信用できない、好きになれない存在であるとすれば、その子供にとっては、一番つらいことになるのだろう。それでも、親の愛情を感じて育った子供であれば、その過程であれこれの紆余曲折はあるにしても、何とか健全に育っていく可能性は高いわけである。一方、親の愛情を受けずに育った子供たちは、どうしても情緒的に不安定になりやすく、また、人間が信じられないという思いになりやすい。しかも、心はいつも「愛情」に飢えていて、愛情を友だちや異性などに求めたがるものだが、その場合、お互いの関係がうまくいって

る時には問題はないだろうが、一方、その愛情を寄せていた異性や信用していた人間などに裏切られた時などには、異常なほど相手を憎む傾向が強くなり、それは、その人の根底に「人間が信じられない」という思いがあるからであり、そういう思いを植え付けてしまったのは、多くは親に責任があるのであり、子供の時に、必要かつ十分な愛情を降り注がないと、つねに「愛情」に飢えた情緒不安定な人間に育ててしまう危険性があるということである。

例えば、今日、家庭の主婦が社会に出て様々な「仕事」に従事することが多くなり、それだけ子供との接触が少なくなる場合が多いかと思う。特に乳幼児期に親の愛情を十分に受けなかった子供たちには、その傾向がより強くなり、やがて、「中・高時代」の青年期になった時に、一気に親への反発となり、いわゆる「非行」や「家庭内暴力」といった形で、子供の時に十分に愛情を受けなかった親へのいわば「復讐」となって表面化することもありわけである。むしろ、親の愛情が十分に得られなかった時だけではなく、逆に、親からあまりにも盲目的な「愛情」を受けた時にも同じような結果になりやすい。それは、なぜかと言えば、例えば、草花に必要な以上に水や肥料などを与え過ぎると、いわゆる「根腐れ」を起こしてしまうのとまったく同じように、親からあまりにも盲目的な「愛情」を受けて育った子供は、自分が精神的に「自立」できないのは、親の過保護や過干渉のせいだと考えるようになり、そのために、親への反発が非常に強くなるわけである。そのように、子供たちが様々な「テレビ番組」からいろいろな影響を受けることは確かであるが、それ以上に、その子供が生まれ育った「家庭環境」から受ける影響のほうが、遙かに「根源的なもの」であり、その人の根源的な「感情や精神」などを形づくるということが非常に多いということである。

だからと言って、「テレビ番組」には何の責任もないということではなく、むしろ様々な「テレビ番組」が子供たちに与える影響も非常に大きなものがあり、しかも生まれた時から、テレビと深く関わるのが非常に多いわけだから、ほとんど「家庭環境」のひとつになっているものである。それほどテレビの存在は、われわれの生活のなかにどこまでも深く根を下ろしているわけだから、テレビ番組の影響というのは、決して軽く見るわけにはいかないものである。ただ、子供たちが「影響」を受けるものとして、例えば、家庭をはじめ、学校や習い事あるいは学習塾などの先生や友だち、その他の人間、動植物、人工物、自然、その他、そういうものとの直接的な「関わり」のなかで様々な影響を受ける場合と、もう一つは、例えば、「……新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、アニメ、マンガ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ゲーム、その他」、そういう、いわゆる「メディア社会やその他」との「関わり」から様々な影響を受ける場合との、大きく分けて、この「二つの場合」があるということである。

十二、乳幼児から

まず、「乳幼児期」であるが、この時期の前半である乳児から二歳ぐらいまでは、家族との「関係」が中心であり、その中でも、特に「母親」（或いは母親的存在）との関係が極めて親密であり、この時期に母親とのスキンシップが不十分になると、子供は、情緒不安定になりやすく、子供に十二分に愛情を降り注いでも害の少ない時期である。

次に、物心のつく二、三歳から小学校に入る前までであるが、この時期は、ふつう子供

たちは、保育園や保育所或いは幼稚園などに通うこととなり、今までのように「家庭」だけではなく、そこで保育士や先生あるいは多くの園児たちと交わったり、また、近所の子供たちと遊んだりして、その活動も非常に活発化する時期である。そして、この「乳幼児期」は、様々な「おもちゃ類」との関係も親密であり、また、何か習い事をしたり、近くの児童公園、その他などで遊んだりする場合も多く、そのように直接的な関わりが多い時期である。もちろん、母親と一緒に絵本を読んだり、また、童話や昔話などを寝る前に聞いたりすることも多く、また、テレビでは、主に幼児向け番組やアニメあるいはお笑い番組などを中心に見ていると思うが、しかし、多くの場合、家族と一緒に様々なテレビ番組を見ていることになるのだろう。そして、そのテレビが、この時期の子供たちにどういう影響を与えるかは分かりにくいものであるが、それほど心配することはないのかも知れない。それよりも、やはり家族や友だちなどとの直接的な関わりの方が大事であり、また、そのほうが大きな「影響」を受けることになるのだろう。むろん様々なテレビ番組からの「影響」も当然あり、幼児たちは、よくテレビで見聞きした「言葉や歌或いは踊り」などを、そのままそっくり真似をしている時期ではあるが、この時期は、ただもういも悪いもなく、何でも真似ることによって、いろいろなことを身を以って貪欲に学んでいく時期にあたるわけである。それゆえ、たとえ悪い言葉を覚えたとしても、それは、ただ単に真似てるだけであり、必要に応じて注意してやれば、いくらかでも修正ができるものであり、それゆえ、必要以上の心配はあまりいらぬということである。

次に、「小学校時代」であるが、この時期は、まさに「家庭、学校、習い事や学習塾、スポーツ、地域の様々な催しや集い、学校の友だちや近所の子供たちとの様々な遊び、その他」、子供たちが最も活発に活動する時期であり、そして、この「子供」の時には、子供としての時期を過ごすことが、何よりも大事なことになるかと思う。——例えば、子供の頃から、すでに「大人の世界」を見聞きしていると、子供は、早く大人になれるから、その方がよいではないかという人もいるが、それは、大変な間違いであり、「子供」の時に、子供としての時期を十分に過ごさないと、いつまで経っても、「大人」になれないのである。つまり、子供としての時期を十分に過ごすことによってこそ、初めて、いわゆる「子供の時期」を卒業できるのであり、もし子供の頃から、すでに「大人の世界」を見聞きして、子供としての時期を十分に過ごさないと、いつまで経っても、子供っぽさが残り、子供っぽい幼稚な思考から抜け出せないのである。つまり、子供としての時期が、しっかりと「卒業」できていないために、いつまで経っても、「子供っぽさ」を大人になっても引きずってしまうものである。むろん、ここで「大人」になるというのは、タバコを吸ったり、酒を飲んだり、あるいは異性と遊ぶというようなことではなく、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になるということであり、そして、ここでいう「子供っぽさ」というのは、他人への依存心が強く、精神的な自立ができていない人間ということになるわけである。

それゆえ、学校の勉強も大事であるが、それとともに、多くの友だちと様々な遊びで思いつき遊び合うことも極めて大事なことなのである。そして、近くの空き地や川辺などで様々な虫や魚などを捕ったり、また、地域の様々な祭りや集いなどに積極的に参加したり、それらを見て、楽しい時を過ごすことも大事であり、そういう直接的な「体験・経験」こそは、その人にとって確かな手応えのある生きた「原体験」として、その人がものを考

える時の最も根底的な「拠り所」となるものである。もちろん、様々なテレビ番組からの影響も、非常に受けやすい時期であり、昔の子供たちは、様々なテレビ番組を真似た「何々ごっこ」などを、もう夢中になって行なったりしたものであるが、それは、今の子供たちもそうなのかも知れないが、そのように子供たちは、とかく影響を受けやすい、また、真似しやすいことは、事実であり、それゆえ、テレビ番組をつくる側も、ひたすら視聴率さえ上がれば、もう何でもかまわないというのではなく、ある程度は、子供たちへの影響ということも考慮に入れて、制作することも大事なことになるだろう。

次に、「中・高時代」であるが、この時期は、第二次性徴とともに、自我がはっきりと目覚めて、異性への関心も高まるとともに、様々なものへの「好奇心」も非常に旺盛になるものであり、この時期は、様々な雑誌や書物などをはじめ、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、アニメ、マンガ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ゲーム、その他の、いわゆる「メディア社会やその他」からの影響を非常に強く受け、しかも、それを真似たり、実行したりする時期にもあたるわけである。というのも、小学生ぐらいまでは、様々な暴力的なものやポルノチックなものを見聞きしても、それを即「実行」に移すだけの「肉体的成長」がまだ不十分な場合が多いかと思うが、「中・高時代」ともなれば、そういう「肉体的な成長」もほぼ十分となり、その人がその気になりさえすれば、いくらでも暴力的なことや性的なことなども、即「実行」できるものであり、また、現実には、そういう実に様々な「青少年の非行」などが、いつの時代でも、また、どの国でも、大きな問題になっているものであるが、それは、いわゆる「第二反抗期」とも重なり合うものであり、それだけ問題が複雑かつ深刻なものになるということである。

つまり、今までは、親や先生あるいは大人たちの言うことを比較的素直に受け入れていたものが、「中・高時代」になると、親の「庇護や干渉」などから離れて、何でも自分で考え、自分で判断し、自分で行動したくなり、また、親や先生あるいは大人たちの言動などに対しても、実に様々な「疑問や矛盾」などを感じて、時には、強く「反発・反抗」するという時期でもあるが、この時期は、その人の「心の中」に深く眠っていた「自我」が目覚め、その目覚めた「本来の自我」（自己）が成長することを望んでいるために、様々なものに対する「好奇心」も極めて旺盛になり、そのために、いわゆる「メディア社会」への関心も非常に強くなるものである。そして、好きな対象があれば、その対象を積極的に受け入れ、そのために、非常に大きな影響を受けやすく、また、この時期に、どのような「……新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、アニメ、マンガ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ゲーム、その他」の、いわゆる「メディア社会やその他」から、どのような影響を受けるかによって、その人の「人間形成」にも非常に大きな影響を与えるものである。——むろん、「中・高時代」は、いわゆる「友だちとの関係」からも直接的に、非常に多くの影響を受ける時期でもあり、それゆえ、できるだけいろいろな人たちと関わり、そして、そのいろいろな人たちからいろいろなことを見聞きするようなことも大事なことの一つになるのだろう。

次に、「大学・社会人時代」（十八歳頃から三〇歳前後）であるが、この時期は、就職をして社会人になる場合と、もう一つは、専門学校や短大あるいは大学などに進学してから、社会人になる場合とがあるかと思うが、そのどちらの場合でも、いわゆる「メディア社会」から様々な影響をなお受け続ける時期であるとともに、様々な「友だちや異性関係」

などからも直接的な影響を強く受けやすい時期でもあるのだろう、そして、三十歳前後になれば、その人の「全過去」(つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などから自ずと形成される、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」なども、ほぼでき上がる時期にあたるかと思う。

そして、子供がいるような大人になってから、その人がテレビ番組からどのような影響を受けて、どういうふうになるうとも、それは、その人自身の問題であり、たとえ様々な「メディア社会やその他」からどのような影響を受けようとも、そういうものに盲目的に振りまわされてしまう、その人自身にこそ、大きな問題があるということである。

話が長くなったが、確かに、様々な「テレビ番組」がそれを見聞きする人たちに何らかの「影響」を与えていることに間違いはないだろう。しかし、最終的には、その人がそれらをどのように受け入れ、そして、それらをどう消化するかにかかっているのであり、結局は、各人一人ひとりの問題になって来るのだろう。ただ、小さな子供たちや若い人たちは、様々な「テレビ番組」から比較的もろに「影響を受けやすい、あるいはすぐに真似しやすい」という傾向は、間違いなくあるわけだから、制作側も、ある程度は、そういうことも考慮に入れておく責任や義務はあるのだろうか。

*

*

人間の眼とカメラの眼との違い

人間の眼とカメラの眼との違い

それでは、人間の「眼」とカメラの「眼」との違いについて、少し話をしてみたいと思うが、ふつう「肉眼」というのは、眼に入ってくるあらゆるものを平等に見ているのではなく、その人が見ようと思っている「対象」を中心に見ているわけであり、それゆえ、見ようとしている中心部から遠ざかれば遠ざかるほどぼけてしまう傾向があるかと思う。つまり、見ようと思っているその「部分」を中心にはっきりと見えているわけだが、それ以外の部分に対しては、むしろ曖昧でぼんやりとした状態で見えている、あるいは無意識の状態に近い感じで見えているものである。むしろその人がわずかでも意識して見れば、その意識の「度合い」にはほぼ正比例して、よりはっきりとした状態で見えて来るものである。

一、人間の眼

例えば、或る女優なら或る女優を見る場合に、若しも見る側の人が、その女優の「顔」を中心に見ていたとすれば、その人は、恐らく、その女優の髪型がどのようなものであったか、耳にはどのようなイヤリングを付けていたか、あるいはどのような感じの衣装やアクセサリなどで身を飾り立てていたか、指の先の爪には、何色のマニキュアをしていたか、さらにはどのような履き物をはいていたか、あるいはどのような感じのバッグ類を持っていたか、指輪は、どこにどのようなものを付けていたかなど、その他、そういうものを後になつて一つ一つ思い出してみると、例えば、「顔」からいちばん離れたところにある足元に、どのような履き物をはいていたかは、見落としてしまつて思い出せないことも多いのだろう。

それは、女優の「顔」ばかりを中心に意識的に見ていたために、足元の方は、おろそかになり、どちらかと言えば、無意識の状態に近い感じで見えていたので、後になつてうまく思い出せないということにもなつてしまう。そのように意識的に見ようとした「部分」は、非常にはっきりと見えていて、後になつてもよく思い出せるものであるが、一方、あまり意識せずに見ていた部分は、いわばぼんやりと見ていたために、後でよく思い出せないということにもなりやすい。そして、見る側の人が、例えば、髪型にとくに興味や関心を持つていけば、その人は、「髪型」を中心として見るようになるだろうし、また、その人が「ファッション」に専門的な関心を寄せていけば、そのファッションを中心に見るようになるのだろう。そして、その人が「髪型」なり「ファッション」なりを中心に一生涯命じていると、それ以外の部分に対しては、とかく見過ごしてしまふことになりやすい。そのように、われわれの「肉眼」というのは、目に入ってくるあらゆるものをすべて平等に見ているのではなく、その人が意識的に見ようと思つたり、あるいは興味や関心を持った部分を中心として見ているのであり、それ以外のあまり興味や関心のない部分は、むしろ軽く見流している、あるいは無意識の状態に近い感じで見えているために、後になつて、その部分がよく思い出せないというようなことは、ふだんわれわれがよく経験しているところではないかと思う。

二、カメラの眼

一方、カメラの「眼」というのは、その「眼」に入って来るあらゆるものをいわば平等に写し出している。例えば、記念に写真などを撮れば、すべての人がみな平等に写し出されているものである。しかも、その写真に写し出された顔や姿あるいは背景などは、すべてはつきりと鮮明に写し出されるものであるが、われわれ人間の「眼」では、そういうわけにはいかない。例えば、ある人を中心に見れば、その人から遠く離れた人の顔は、ふつうぼんやりと曖昧になるものである。また、人間を中心に見ていけば、その背後の背景などは、ふつう見過ごしてしまうことが多い。むろん、望遠レンズや広角レンズなどを使えば、撮れば、バックをぼかすこともできるし、また、魚眼レンズや広角レンズなどを使えば、かなりダイフォルメされた写真を撮ることもできる。しかし、それ以外のふつうの場合は、ありとあらゆるものをいわば平等に写し出しているものである。

むろん、カメラの「眼」としては、「写真」だけではなく、例えば、映画、テレビ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、その他の、いわゆる「映像」があり、そして、今後、ますますそういう「映像的なもの」が主流を占めることになるのだろう。そして、「写真」というものが、ある一瞬の「状態」を写し出しているのに対して、「映像」というのは、カメラをまわし続けられ、ずっと映し出しているのと同時に、ふつうそれに「音」が加わって来るものであり、それだけ「映像」の方が遙かに人間の「感覚」により近いと言えるものであるが、まず、「写真」について、もう少し考えてみたいと思う。

さて、十九世紀の中頃に誕生した「写真機」は、その後のめざましい技術革新によって、今日では、極めて高性能なカメラから極めて特殊なカメラ、また、性能も高く、取り扱いも簡単な一般的なカメラまで、実に多種多様な「写真機」が数多く出そろっていて、その人が望むようなカメラを比較的手軽に購入できる時代となり、そして、旅行などに出かけるような時には、多くの人たちがカメラを手にとって出かけ、そして、例えば、記念になるような場所によく写真を撮っては、それをアルバムに貼って大事に保存している人も極めて多く、そのように、今日では専門のカメラマンだけではなく、いわば趣味として行なっているアマチュアカメラマンの人たちも、極めて数多くいて、なかには専門家よりも遙かに有意義な活動を行なっている人たちも、意外に数多くいるということである。

それはともかく、「写真」というものが、われわれ人間の「社会生活」のなかにどれほど深く溶け込んでいるかは、驚くばかりである。例えば、新聞、雑誌、書物、CD、DVD、パンフレット、ちら紙、その他で、写真が使用されるのはもとより、様々なポスターやカレンダーなどに写真が使われることも多く、また、その人が当人であることを証明するために「写真」が使われることは、さらに多く、例えば、履歴書、学生証、受験票、運転免許証、パスポート、その他、それに社員証や行員証（うゐんしん）あるいは職員証、また、最近では、写真入りの名刺などにする場合もあるかと思う。さらに見合い写真や婚礼写真、そして、子供の成長や家族を撮った「写真」、あるいは旅行に行った時の「写真」、また、運動会をはじめ、遠足や旅行或いは学園祭や卒業記念写真、さらに春夏秋冬に催される様々な行事や祭りを撮ったり、その他、もちろん、美術全集や動植物の写真図鑑、また、様々な写真集やプロマイド、その他、もう例を挙げればきりが無いが、そのように「写真」というものが、われわれ人間社会のなかにどこまでも深く溶け込んでいて、われわれは、もう様々な機会に「写真」と関わっているものであり、しかも、ケータイやスマートフォン或いは

はデジタルカメラなどの普及によって、今日では、もう「写真」というものをわれわれ現代社会から取り除くことなど、まったく不可能なほど深い関係にあるということである。

三、写真の特徴

それでは、その「写真」というものの特徴について、もう少し考えてみたいと思う。確かに、写真は、或る一瞬の「状態」を写し出している。そのことに間違いはない。だからと言って、写真は、或る一瞬の「事実」をいつも写しているとは限らない。なぜなら、その「光の量」の調整を間違えれば、写真は、実際とはかなり違った濃淡や色彩になりやすく、また、その写真から受ける印象と実物とは、かなり違ったものになってしまいうからである。もちろん、今日では、全自動のカメラが主流であって、そういう失敗もほとんどなくなり、より自然に近い感じの色彩で撮れるようになっては来ているが、それでも、われわれの「眼」が感じる色彩とカメラの「眼」が写し出す色彩との間には、かなりの違いがあるのだろう。それとともに、われわれの「肉眼」が直接見て感じる立体感や実在感と「写真」で見る感じとは、やはり、かなり違うところがあり、「写真」というのは、どうしても「平面的」（或いは一面的）な感じになりやすく、それゆえ、その立体感や実在感なども、実物とはかなり違った感じになりやすい傾向があるということである。

次に、カメラアングルであるが、どの角度から写真を撮るかによって、同じ対象でも、その感じが非常に違って見えるものであり、特に「写真」の場合には、或る一方向からカメラを対象に向けて、或る一瞬の「状態」を写し出すものであり、同じ対象でも、右から撮ったものと左から撮ったものとは感じがかなり違うものになるだろう。しかも、「写真」は、或る一瞬の「状態」を写し出すものであり、それゆえ、その前後の「状態」がどういうものであったかは、一枚の写真だけではよく分からないものである。例えば、人間の「顔の表情」などは、その時々に対応して、実に様々に変化するものだが、しかし、その一瞬の「顔の表情」が、その時のその人の「心の状態」をそのまま表しているかどうかは、極めて難しい問題であり、或る一瞬の「顔の表情」が、その時のその人の一瞬の「心の動き」をたとえ表しているとしても、それがそのままその人の持続した「心の状態」をそのまま語っているかどうかは分からないものである。つまり、人間の「顔の表情」と「心の状態」とが、いつも合致しているものではなく、例えば、最愛の肉親を亡くして、その人の「心の中」は、深い悲しみに満ちていても、人前では、ふだんとほとんど変わらない「顔の表情」をしていることもあれば、また、その人の「心の中」では激しく腹を立てていても、「顔の表情」では笑っているということもあるのだろう。それゆえ、その人の「顔の表情」が、そのままその人の「心の状態」を正確に表しているかどうかは、よく分からないものである。しかも、写真を撮る時には、隠し撮りされる場合以外は、ふつうカメラを向けられていることを知っているわけだから、どうしてもカメラを意識した「顔の表情」にならざるを得ないだろう。確かに、ある一瞬の「顔の表情」は、その時の一瞬の「心の動き」を表しやすいものであるが、しかし、それすらも必ずそうであるとは断定できないものである。しかも、われわれは、自分ですら自分の心がよく分からない時もあるれば、また、瞬間瞬間に、自分が今どういう「顔の表情」をしているかなどは、誰だつて責任の持ちようがないものである。それゆえ、「顔の表情」だけで、その人の「心の状態」をその

まま推しはかることには、やはり大きな問題があると言えるものである。

確かに、一枚の「写真」は、或る一瞬の「状況や状態」を写し出している。そのことに間違いはない。しかし、その前後の「状況や状態」が、いったいどういうものであったのか、また、「写真の枠」のなかに入っていない周辺の「状況や状態」は、いったいどういうものだったのか、その他、そういうことは、一枚の「写真」だけでは、よく分からないものである。しかし、われわれは、その「一枚の写真」から実に様々な印象を受けるし、また、あれこれ豊かに想像力を働かせて、実際や実物とはかなり違ったイメージを各人が勝手につくり上げてしまう危険性も高く、ここにこそ、「写真」というものの最も危険な落とし穴がある、と言えるものである。つまり、われわれは、とかく「写真」というものは、事実を写し出しているものだ」と、簡単にそう考えがちであり、確かに、「写真」というものは、そういう一大特徴を間違いない持ち合わせているものである。もし「写真」というものが、「実物」とは似ても似つかぬものを写し出すとしたら、それこそ、「写真」というものの存在意味がまったくなくなってしまうからである。しかし、だからと言って、「写真は、つねに事実を写し出している」ということにはならないだろう。

それは、もう誰もが経験しているように、例えば、人間、動植物、自然の風景、乗物、建物、街の様子や店の感じ、あるいは様々な商品、その他、それは、もうどういふものであれ、いわゆる「写真」で見た感じと「実物」とがかなり違っていることはよくあることなのである。つまり、「一枚の写真」が与える印象が、そのまま「実物」の印象を正確に写し出しているとは、限らないものである。それは、人間の「眼」とカメラの「眼」との根本的な違いによるものもあれば、いわゆるカメラアングルや写真の切り方などによっても違って来るだろう。それに加えて、「写真」は、その人に写真技術とその気がありさえすれば、いくらでも修正を加えたり、合成写真を作ったり、あるいは故意に事実にした意図的な写真を創り出すことも、容易にでき得るものである。また、光線などの関係から、ありもしないものを写し出すこともあり、それゆえ、写真というものを、そのまま事実（或いは真実）として盲目的に信じることには、やはり危険性があるということである。むしろ、写真には様々な長所も利点も数多くあり、その一つが、何と言っても、「百聞は一見に如かず」ということであり、例えば、ある自然の風景をあだこうだと事細かに説明されるよりも、一枚の写真を見せてもらえれば、ああ、なるほど、こういう風景なのか、とすぐに分かるわけであるから、これ以上に便利なものはないわけである。

確かに、「写真」は、或る一瞬の「状況や状態」を写し出しているものであり、しかも、われわれの「肉眼」ではとらえられないような早いスピードのものを、はつきりとキャッチすることもでき得る。例えば、競馬や競輪などの「写真判定」などは、まさにその代表的なものであり、また、レントゲンのように直接見ることのできない体の中をも写し出してくれる場合もある。そのように写真の長所も数多くあり、しかも、「写真」は、或る一瞬の「状況や状態」をそのまま写し出すだけのものではなく、「写真」には「写真」独自の世界があり、それがいわば芸術的な写真としても幅広く存在するものである。そのように、今日では、プロのカメラマンから、まったくの素人の人たちまで、実に数多くの人たちが、いろいろな目的や用途でカメラを利用し、様々な「写真」を撮っては、各人それぞれ思い思いに楽しい時を過ごしているということである。

四、映像の特徴

一方、「写真」が、ある一瞬の「状況や状態」を写し出しているのに対して、「映像」というのは、ある持続した「状況や状態」を映し出しているものであり、それだけ人間の「感覚」により近くなるとともに、確かに「映像」というのは、現実とほとんど同じものを映し出しているものである。しかし、「映像」と「現実」との決定的な違いは、一体、どこにあるのかと敢えて問えば、それは、「映像の世界」というのは、まさに「視覚と聴覚」だけの世界であり、それ以外の、つまり、「……嗅覚、味覚、触覚、温度感覚、その他」などの感覚は、直接、知覚できないというところにあるのである。

例えば、料理番組を観ていけば、その料理がどういうものであるかはよく分かるが、しかし、どういう味や香りがするのかは、まったく分からない。また、春夏秋冬の自然の風景などを観ていても、例えば、そこに吹く風や暑さあるいは寒さなどの感じ、また、様々な動植物などにふれた感じや草花の香りや匂い、海の中を泳いだ時の感じや砂浜の感触、また、山などのキャンプ生活で虫に刺されたりや溪流などの水の冷たさ、あるいは、登山の厳しさや火山爆発の凄さなど、その他、そういうものは、いくら映像や言葉で説明されても、実感としては、よく分からない。また、映画やドラマなどで男女の濡れ場などを観ても、その実際の感触は、観ている人たちにはまったく分からない。また、ニュースなどで台風の激しい暴風雨などを生中継すれば、それを映像で観ている人たちは、「ああ、すごいなあ!」とは思っても、直接、それを実感することはできない。そのように、われわれが「映像」を通して観るのと、実際に自分がそれを「体験・経験」するのでは、少し違うというよりは、むしろ根本的に違うものである。つまり、「映像」が、いわゆる「視覚と聴覚」だけの世界であるのに対して、われわれが現実に「体験・経験」する世界というのは、「視覚や聴覚」だけの世界ではなく、それに加えて、「……嗅覚、味覚、触覚、温度感覚、その他」などの総合的な世界であり、そういう様々な感覚を通じて、われわれは「現実社会」で様々な「体験・経験」をしているということである。それゆえ、例えば、ライブ・ステージなどを、その会場に行つて、実際、生で音楽を聴くのと、それと同じものをテレビやビデオあるいはDVDなどで見聞きするのでは、少し違うというよりは、何かまったく違うもののように感じられるものである。それは、音楽だけではなく、例えば、スポーツの競技場の熱気や生の迫力なども、映像とはかなり違うものになるのだろう。とは言え、「映像」は、これから、ますます大きな役割を果たすことになるのだろう。

確かに、テレビやビデオあるいはDVDなどは、一応、現実と同じようなものを映し出しているものである。例えば、テレビが行なう「生中継」などでは、現実とまったく同じようなものを同時進行で鮮やかに映し出しているものであり、これは、やはり極めて大きな機能なのである。しかも、後で何度でも再生することができ、しかも、例えば、スポーツなどの生中継であれば、もう一度、観たい場面などは、何度でもリプレーでじっくりと観てくれるわけだから、その機能には実に素晴らしいものがあると思うとともに、それは、そのまま「現実」の生きた「記録保存」ともなり得るものである。そのように「映像」というのは、現実というものをそのままそっくり映し出しているように一見見えるが、しかし、厳密に考えれば、やはり「写真」と同じように、われわれ人間の「肉眼」とカメラの「眼」との間には、根本的な違いがあるということである。例えば、われわれの「肉眼」

が直接感じる「色彩や立体感あるいは実在感」などと、カメラの「眼」がとらえるものとの間には、やはり違いがあるだろうし、また、カメラの「眼」からはずれた部分が、いったいどうなっているかは、まったく分からない。さらに生中継以外は、例えば、映画、テレビ、ビデオ、DVD、動画、その他などは、すべて数多くのカットとカットとの映像をつなぎ合わせたものであり、そこには制作側のはっきりとした作り手の意図があるわけだから、「事実」そのものをそのままそっくり映し出しているとは言えないものである。また、テレビに出演している人たちも、それが芸能人であれ、あるいは素人の人たちであれ、どうしてもテレビカメラというものを意識するだろうし、そうなれば、やはり、そのテレビ番組に合わせたような対応になるのは、仕方のないことである。そのようにテレビで見聞きしたものを、そのまま「事実」（或いは「真実」として盲目的に信じることには、やはり大きな危険性があると言えるものである。

むろん、そういう細かなことをいろいろ気にする必要は何もないわけで、テレビでもビデオでもまたDVDでも動画でも、その人なりに気楽に楽しめば、それでよいものであり、また、誰だってそうしているわけである。そして、最近では、ホームシアターなども非常に普及しているとともに、今日では、写真だけではなく、最新の「ビデオカメラ」などを使って、例えば、子供の成長記録や運動会などを撮ったり、また、旅行などに行った時にも、ビデオカメラなどを使って撮ることも多いかと思う。また、様々なパーティーや宴会の様、また、結婚式や披露宴などを記念に撮ったり、あるいは趣味として、様々な工夫を凝らしたビデオなどを作ったり、あるいは動植物の生態や自然の風景などを記録として撮る場合もあるのだろう。また、市販されている「DVDやブルーレイ」などにも多種多彩なものがあるかと思う。例えば、多種多彩な映画や音楽の「DVDやブルーレイ」などを初めとして、各種多彩な実用的な「DVDやブルーレイ」もあれば、アダルト系の「DVDやブルーレイ」などもあり、その他、今後、ますますそのような多種多彩な「DVDやブルーレイ」などとともに、最新の「ビデオカメラ」の使用なども、さらに日常一般化し、もう誰でも手軽に様々な「目的や用途」などで使用できるようになるかと思う。

そのように、「……映画、テレビ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、その他」の「映像」（写真）は、あらゆる「分野」（領域）に渡って、今後、極めて大きなウェートを占めていくことは間違いなく、それだけわれわれは、毎日、日常茶飯事のように様々な「映像」（写真）と関わって生活するようになり、また、それを当然のように受け入れるようになるかと思う。それは、それでよいわけだが、ただ、「写真や映像」で見聞きしただけで、実際に自分が見聞きし、それを「体験・経験」したような気分になりやすく、それだけでも満足しがちなものであるが、しかし、「写真や映像」で見聞きしたものは、すべて「間接的な知覚」であり、自分がその場で実際に見聞きし、それを「体験・経験」する場合は、いわゆる「直接的な知覚」とは少し違うというよりは、むしろ「根本的に違う」ものであると、はっきりと自覚を持つことは、非常に大事なことであり、そうでないと、「写真や映像」を見ただけの感じで、それをそのまま「事実」（或いは「真実」として盲目的に信じてしまう危険性があるからである。それは、「写真」は、或る一瞬の「状況や状態」を写し出す「視覚だけの世界」であり、また、「映像」は、カメラの「眼」がとらえた「視覚と聴覚だけの世界」であり、われわれが実際に見聞きし、「体験・経験」している総合的な「知覚」とは、はっきりと違うものであり、また、われ

われの「肉眼」とカメラの「眼」との違いについても、十分に考慮に入れなければならぬ。とは言え、一人の人間が実際に見聞きしたり、「体験・経験」したりすることには、自ずと限界があるのである。それを補うように様々な「写真や映像」などを見ることによって、それこそ、何百、何千倍もの多種多様なものを間接的ではあるが、ほぼ実際に近い状態で見聞きすることができ、しかも、ふだんわれわれの「肉眼」では見ることでできないようなものまで、例えば、空からの撮影や海の中の生物の様子、また、様々な動植物の生態や宇宙の世界まで見せてくれることもあるわけだから、これは、やはり実に素晴らしいものであると言えるものである。

それに比べて、確かに自分自身が見聞きし、「体験・経験」することには、自ずから限界がある。しかし、その直接的な「体験・経験」こそは、われわれが「実感」として確かに感じることができ得る「唯一絶対のもの」であり、それこそが「確かな手応えのある」ものなのである。とは言え、この世にあるありとあらゆるものを実際に見聞きし、直接、「体験・経験」することなど誰にも不可能なことであり、それを補うためにも様々な「写真や映像」などを見聞きすることによって、何百、何千倍もの多種多様なものを間接的ではあるが、見聞きすることができるわけである。そのように自分自身が直接見聞きし、「体験・経験」することによって、いわゆる「実感」を得ることは、極めて大事なことであり、それに加えて、多種多様な「写真や映像」などで見聞きすることも大いに取り入れ、最大限に活用すれば、それだけ「必要かつ十分」なものになるので、どんな「写真や映像」なども、積極的に最大限活用するのが一番よいことになるだろう。というのも、われわれの「肉眼」は、とかく間違いや勘違いをおかすことも多く、また、遙か遠くにあるものや速く動くもの、あるいは極めて微小なものなどを正確に捉えることができないという難点があり、それを補ってくれるのが、まさにカメラの「眼」であり、われわれの「肉眼」よりも遙かに正確に対象を捉える機能を持っているわけだから、それを最大限に活用することによって、われわれ人間の「肉眼」の欠点を補うことになることも、カメラの「眼」によってとらえられた対象は、まさに「写真や映像」として、かなり長い歳月に渡って、「保存」や「再生」が可能になるという利点もあるわけである。そのように、「写真や映像」などを最大限に活用したらよいと思うし、また、実際、すでに「映像化時代」は到来しているのである。ただ心配なのは、いわゆる「映像的なもの」にあまりに片寄り過ぎるあまり、一方の「活字」を軽視するような風潮になるとすれば、それは、やはり大きな問題であり、「活字」だけに片寄るのも、また、「映像」だけになってしまうのも危険なことであり、やはり「活字」と「映像的なもの」とがバランスよく、しかも、より高いところで「深く調和」させることこそ、これからの大きな課題になっていくということである。

五、インターネット時代

さらに、今日では、例えば、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他、そのような「インターネット」による「情報伝達手段」の発達も、めざましいものがあるかと思う。それでは、従来型の「マスメディア」（つまり「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」と、今日型の新しい「インターネッ

ト文化」との「決定的な違い」は、いったいどこにあるのかと敢えて問えば、それは、次のようになるかと思う。

まず、最初に考えられることは、その「規模」の大きさの違いである。つまり、従来型の「マスメディア」の場合は、基本的には「国内的な規模」のものであるのに対して、今日型の新しい「インターネット」の場合には、この地球上のありとあらゆる地域がインターネットで繋がっている、まさに「全世界的な規模」の情報伝達手段であるということである。つまり、その「規模の大きさ」があまりにも違い過ぎるということである。次に、考えられることは、その「情報伝達の速さ」の圧倒的な違いである。つまり、従来型の「マスメディア」である、例えば、新聞、雑誌、書物、その他などは、いわゆる「情報伝達の速さ」という点だけから言えば、あまりにも遅過ぎる。また、テレビもラジオも「情報伝達」の手段としては、比較的「速い」ほうであるが、しかし、「ニュース速報」やすぐに「生中継」などに切れ換えれば速いが、それ以外の場合には、どうしても「ニュースの時間」まで待たなければならず、例えば、あるスポーツの結果がすぐにも知りたいと思っても、今までは、ニュースのスポーツの時間まで待たなければならなかったが、今日では、ウェブサイトで、一瞬にして「知りたい情報」が得られるようになっていたのである。

また、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他の「インターネット」の場合には、まさに「一瞬で、全世界に情報が発信される」ということである。しかも、その発信地も、その発信時間も、そして、その発信者も、いわゆる「マスメディア」のように限られた場所から、限られた時間に、そして、限られた人たちによって行なわれるものではなく、むしろ「インターネットで繋がっているありとあらゆる地域のありとあらゆる人たちが発信者になり得る」ということである。つまり、その「規模」とその「速度」、そして、その「発信者の数」などが、あまりにも圧倒的に違い過ぎるという、まさに全員参加型の「地球規模での情報伝達手段」であるということである。しかも、その内容も、「マスメディア」では極めて限定的なものであるが、一方、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他の「インターネット」の場合には、まさに「ありとあらゆる内容のものが、ありとあらゆる時間に、ありとあらゆる地域から全世界にと発信される」ということである。

もちろん、従来型の「マスメディア」の良さも当然あるわけで、それは、何と言っても、「情報の正確さ」ということであり、必ず裏を取り、うそや曖昧なもの或いはでたらめな情報などは、原則として、すべて排除されているということである。一方、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他の「インターネット」の場合には、ほんとうのこともうそのこともまた曖昧なものでもたらめなものも、その他、もうありとあらゆるものがあり、それゆえ、その「情報」のどこまでが信用できるかが最大の問題であるとともに、それらの問題をこれからどのように解決していくかが最大の問題の一つとなっていくのだろう。

六、結び

そして、今や、まさに世界中のありとあらゆる地域のありとあらゆる人たちとインターネットで繋がっているという、そういう、まさに「インターネット時代」の到来ではある

が、それでは、その「インターネット時代」というものは、これからのわれわれ人間社会に、いったいどのような「影響」を与えることになるのだろうか？ また、その「インターネット時代」のまさに「長所や短所」というものは、一体、どのようなものになるのだろうか？ それらのことについて、もう少し考えてみたいと思う。……

例えば、誰もがよく知っている有名な「YouTube」というサイトがあるが、これなどは、まさに「映像化時代」を現実的に「具現化したもの」であり、それは、世界中のありとあらゆる地域のありとあらゆる人たちの誰であれ、その有名な「YouTube」というサイトへと自ら「投稿した映像」の実に膨大の量の宝庫であり、それゆえ、例えば、自分が見聞き知りたいことを、その「検索」に入力してクリックをすれば、多くの場合、それらの「映像」を見聞きすることが出来るようになっていく。例えば、昔の懐かしい「音楽」や「ドラマ」などを見聞きしたいと思えば、例えば、その「検索」に「ザ・ピーナッツの恋のバカンス」とか、「松坂慶子の愛の水申花」とか、或いは、「竹脇無我と栗原小巻の三人家族」などと入力すれば、それらの「映像」がそれぞれ映し出されて来るものであり、もしこの有名な「YouTube」というサイトがなければ、恐らく、二度と見られなかった「映像」に違いないのである。もちろん、そこでたとえ見聞きできなくても、例えば、有料サイトに入れば、比較的低価格で、古今東西を問わず、世界中の実に膨大かつ様々な「音楽や映画或いはドラマやアニメ、その他」、何であれ、自分の見聞き知りたいことの、ほとんどすべてを見聞きすることができ得るとともに、今、すぐにも知りたい、実に様々な最新の「情報や知識」（例えば「政治、経済、国際情勢、教育、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、また、ショッピング、旅行、ホテル予約、天気、食べ物、レストラン、美容、出会い系、銀行、電子書籍、ゲーム、その他」、何であれ、まさに「アクセス一つ」であつという間に見聞きすることができ得るものであり、そういう意味では、まさに「画期的なもの」であり、いわゆる従来の「マスメディア」（例えば「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」）だけの時代には、決してでき得なかつたことであり、それは、世界中のありとあらゆる分野の実に膨大かつ多種多様な「情報や知識」などが何の苦もなくあつという間に見聞き知ることのでき得るような時代になつたということである。

つまり、昔は、まさに「マスメディア」（例えば「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」）などから、実に様々な「情報や知識」などを得ていたものであるが、もちろん、それは、今なおそうではあるが、しかし、時代は、今までの従来型の「マスメディア」（例えば「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」）などの時代から、まさに今日型の「インターネット時代」（例えば、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他）へと大きく移行し始めているということであり、しかも、従来型の「マスメディア」（例えば「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」）なども、今日型の「インターネット」（例えば、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他）の中へとどんどん取り込まれているのであり、それゆえ、今や「インターネット一つ」で、ほとんどすべての用を足すことができ得るような時代になつたということである。この「流れ」は、もう誰も止めることのできない、まさに「新しい時代の到来」であり、この「大きな潮流」こそは、まさに「インターネット時代」の「最大の長所」にもなり得るものである。

確かに、「映像化時代」というのは、この世の実に様々な「活動や出来事」その他など

をそのままそっくり映像で映し出すことのできる時代のことであり、それは、まさに「画期的なもの」ではあるが、しかし、一方、その「表面的な映像」のもっと奥にある、この世の実に様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などは、映像では映し出すことのでき得ないものであり、そういう「最大の欠点」をも同時に持ち合わせているものである。——つまり、「映像」というのは、どうしても「表面的な現象」（つまり実に様々な物事の「表面的な現象」や実に様々な人間の「表面的な現象」（つまり実に様々な物事の「表面的な現象」や実に様々な人間の「表面的な言動」）などを見聞きしては、それをそのまま「真の姿」（つまり「事実や真実」その他）などと思ひ込みやすいところがあるが、しかし、そのような「表面的な現象」（つまり「見た目の感じ」というのは、いわば「仮相」であり、いわゆる「実相」そのものであるかどうかはよく分からないものであり、それゆえ、物事の「仮相」ではない、もっと奥にある「実相」そのもの（つまり「真の姿」）をとらえることが、何よりも大事なことになるが、それを行なっているのが、まさにわれわれ人間の「思考（思索）活動」であり、そのようなことは、むしろ従来の「活字文化」（例えば「新聞、雑誌、書物、その他」）のほうが、遙かに得意としたものである。……

つまり、われわれ人間の「目」によってとらえられるものは、すべて物事の「表面的な現象」に過ぎず、それは、絶えず変化して止まることのないものであり、それゆえ、まさに「仮相」（つまり「仮の姿」）であるが、その「表面的な現象」のもっと奥にある物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを厳密にとらえることが、すなわち、「実相」（つまり「真の姿」）をとらえるということであるとともに、それには、当然のことながら、それぞれ「個人差」があり、そして、真に「内的成長（成熟）」した「心の眼」によつてこそ、初めて、どこまでも厳密にとらえることができ得るようになるということである。一方、そうではない人たちというのは、どうしても「表面的な現象」などに意味なく振りまわされてしまい、もっと奥にある、いわゆる物事の「実相」（つまり「真の姿」）をとらえるということとは、なかなかできにくいとともに、その「表面的な現象」（つまり実に様々な物事の「表面的な現象」や実に様々な人間の「表面的な言動」）などを見聞きしては、それをそのまま「真の姿」（つまり「事実や真実」その他）だと思ひ込みやすいということでもあり、それこそは、まさに「映像化時代」の「最大の欠点」となっていくものである。それゆえ、何よりも大事なことは、むしろ従来型の「活字文化」（例えば「新聞、雑誌、書物、その他」）と、今日型の「インターネット文化」とを、より高いところで深く調和させることこそは、何よりも重要かつ大事なことになるということである。

*

*